

〈新刊紹介〉

原田裕司著

『キリシタン版『羅葡日辞書』の原典「カレピーヌス」 ——ラテン語辞典の系譜——

本書は、ラテン語文献学者である著者の視点から、1595年に出版されたキリシタン版『羅葡日辞書』に至るまでの「カレピーヌス」ラテン語辞典の系譜を明らかにするものである。「カレピーヌス」は16世紀から18世紀にかけてヨーロッパ各国で出版されたラテン語辞典である。筆者は、精緻な文献学的調査・研究に基づき、カルドース『羅葡辞典』が『羅葡日辞書』の編纂に用いられたとみられることや、『羅葡日辞書』がアルファベット順の見出し語配列を徹底化していることを指摘し、1580年リヨン版に至る「カレピーヌス」の系譜の考察に基づいて、1580年リヨン版「カレピーヌス」が『羅葡日辞書』の原典と考えられることを論じている。

「第1章 日本にて——『羅葡日辞書』から「カレピーヌス」へ——」, 「第2章 ドイツにて——「カレピーヌス」を巡る旅——」, 「第3章 イタリアにて——「カレピーヌス」の故郷——」, 「第4章 再びドイツにて——1570年リヨン版との出会い——」, 「第5章 フランス（国立図書館）にて——パリ版「カレピーヌス」とカルドース『羅葡辞典』——」, 「第6章 「カレピーヌス」におけるアルファベット順の見出し語配列の系譜」, 「第7章 序文から見る1570年リヨン版とその後継版」, 「第8章 1570年リヨン版とその後継版の探索」, 「第9章 1570年リヨン版「カレピーヌス」の増訂者ユーストゥス・レゥベルの業績と生涯」, 「第10章 フィリップ・ティンギ印刷による1578年リヨン版と1580年版」, 「第11章 フランス学士院図書館蔵『羅葡日辞書』と「本の都市」リヨン」, 「第12章 『羅葡日辞書』の原点についての岸本恵実氏の研究」, 「第13章 私の「カレピーヌス」コレクションと小辞典類——架蔵書（原本）、マイクロ複製、デジタルCD——」, 「第14章 補遺と総括」, 「終章 辞書の愛蔵者たちへの挽歌」。

(2011年10月24日発行 私家版 A5判横組み 386頁)

笹原宏之著

『方言漢字』

本書は、日本語学と漢字学の視点から、全国各地で使われている地域独自の「方言漢字」を、各地の人々が独自の自然、習俗や言葉に合わせて工夫を加え、育んだ個性豊かな漢字として紹介するものである。日本語の文字と表記は、世界でも稀な多様性と自由度の高い運用法が掛け合わされてきた。これに社会的・地域的な集団による違いが立体

的に掛け合わされることで豊富な選択肢が生まれ、各地の人々の文字生活において活力を生み出してきた。各地で「共通字化」が進む現代、各地の人々の「文字生活」という視点から、文字とは何か、文字と地域との関わりについて述べる。

「第一章 漢字と風土——漢字の使用地域とそこに暮らす人々——」, 「第二章 北海道・東北の漢字から」, 「第三章 関東の漢字から」, 「第四章 中部の漢字から」, 「第五章 近畿の漢字から」, 「第六章 中国・四国の漢字から」, 「第七章 九州・沖縄の漢字から」, 「第八章 方言漢字のこれから」。

(2013年2月25日発行 角川学芸出版刊 四六判縦組み 256頁 1,800円+税 ISBN 978-4-04-703520-1)

滝浦真人著

『そうだったんだ！日本語 日本語は親しさを伝えられるか』

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第2巻。「作法」に寄りかかってきた日本語のここ百年をたどり、成熟した「親しさのコミュニケーション」への変化のきざしを見いだす書。

日本語は、この百年、対人的な距離を大きくとり、相手の領域に触れたり踏み込んだりしないという形で丁寧さを示す敬語はあっても、対人的な距離を小さくする「親しく交わる」ための言葉は育んでこなかった。上下関係ではなく親疎関係をベースとする人間関係に変容した現在、「親しさのコミュニケーション」をどのようにとっていくのか提言する。

「第一章 どこにもない「標準語」」, 「第二章 日本語の“あいさつ文化”」, 「第三章 コミュニケーションをとらえる」, 「第四章 時空を旅してみれば」, 「第五章 日本語は親しさを伝えられるか」。

(2013年4月24日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 216頁 1,600円+税 ISBN 978-4-00-028622-0)

岸江信介・太田有多子・中井精一・鳥谷善史編著

『都市と周縁のことば——紀伊半島沿岸グロットグラム——』

南近畿地方に位置する熊野灘沿岸地域を対象とした方言調査についての論文集である。2002年8月から2003年3月までに、三重県鳥羽市から和歌山県田辺市までの19市町村23地点の4世代を対象に音声・アクセント・語彙・言語意識について行ったグロットグラム調査の結果を、15名の執筆者が分担して分析している。京阪など関西の中央部に位置する都市部のほか、東海地方の中心である名古屋などの都市との比較を通じ、近畿地方の方言の宝庫とも呼べる南近畿地方の方言の実態に迫ることを目的とする。本書は、和泉書院研究叢書434として発刊された。

「本書の企画と調査概要」(岸江信介), 「紀伊半島周縁部の方言分布と地域特性」(中井精一), 「紀伊半島沿岸におけるアスペクト表現の変異」(岸江信介), 「紀伊半島沿岸部に

おける打消表現」(太田有多子),「無敬語地帯の素材待遇表現について——鳥羽市～田辺市間
グロットグラムと『大阪のことは地図』からの考察——」(西尾純二), 他 11 編。

(2013 年 5 月 15 日発行 和泉書院刊 A5 判横組み 364 頁 9,000 円+税 ISBN 978-4-7576-0666-1)

清水康行著

『そうだったんだ！日本語 黒船来航 日本語が動く』

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第 3 巻。西洋諸国との間に結ばれた最初の外交条約である「日米和親条約」(1854 年)から安政の五ヶ国条約(1858 年)に至る数年間の外交交渉と外交条約を主な材料として、阿蘭陀通詞や幕臣たちが「黒船」がもたらした西洋流の論理と西洋言語の表現法と直に向き合い、それを理解し、新たに「日本語」での的確な表現を与えていった軌跡を描いている。「第一章 最初の出会い」,「第二章 「長崎口」の蘭通詞たち」,「第三章 オランダ語「正文」の時代」,「第四章 条約文と近代日本語」,「第五章 主役たちの交代」の 5 章からなる。第二章では、黒船来航以前の時代における対外交渉との言語の問題、第三章では、日米和親条約から安政の五ヶ国条約に至る期間の外交条約および媒介言語に対する姿勢の変化について論じられている。第四章では、外交条約文において「候文」から「べし文」が選択されるようになった背景が、「入り組んだ仮定的な条件を示す条文」という構文的な問題とも関連付けながら論じられている。引用されている外交文書類の底本として最も活用されているのは、東京大学資料編纂所編『大日本古文書幕末外国関係文書』(1910 年～、刊行継続中)である。

(2013 年 5 月 24 日発行 岩波書店刊 B6 判縦組み 228 頁 1,600 円+税 ISBN 978-4-00-028623-7)

大木一夫著

『ガイドブック日本語史』

本書は、日本語史を解明する方法について多面的かつ総合的に概説した新しい観点による入門書である。古い文献を対象にした文献言語史研究や、社会言語学的研究、方言学的研究など、先学の史的研究の成果を紹介しながら、言語の移り変わりを明らかにする方法について、概略を整理し、主に日本語の事例を通じて具体的に説明する。末尾の「文献ガイド」では、日本語史研究における具体的な技法と手続きを扱う入門書や専門書を紹介する。

「第 1 章 ことばは変化する——歴史言語学序説——」,「第 2 章 ことばはなぜ変化するのか」,「第 3 章 信頼できるテキストを求めて」,「第 4 章 文献にあらわれた言語の性格(1)——作品成立時の言語の姿にせまる——」,「第 5 章 文献にあらわれた言語の性格(2)——言語の位相差と地域差——」,「第 6 章 文献による言語の歴史」,「第 7 章 文献以前の言語の姿をさぐる」,「第 8 章 言語の地域差と言語の歴史(1)——比較方言学とその方法——」,「第 9 章

言語の地域差と言語の歴史(2)——言語地理学とその方法——, 「第10章 方言による言語史と文献による言語史」, 「第11章 言語の体系性と言語の歴史——内的再建——」, 「第12章 社会のなかの言語と言語変化」, 「おわりに (付 文献ガイド)」。

(2013年5月29日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 266頁 2,200円+税 ISBN 978-4-89476-615-0)

野村剛史著

『日本語スタンダードの歴史——ミヤコ言葉から言文一致まで——』

本書は、スタンダード(標準語)の成立についての著者の一連の論考を全面的に改稿する形でまとめる書である。江戸山の手語から東京山の手語を経て標準語に至るという通説に対し、中世末期上方語から近世スタンダード、明治スタンダードを経て現代スタンダードに至るという、通説を覆す結論を得る。スタンダード成立の萌芽が見られる室町期の言語から考察を始め、中世末期の上方語がスタンダードとして近世に江戸の教養層言語を形作り、この近世スタンダードが更に明治期に東京の教養層言語を形作ったことを示す。

さらに、「標準語」と合わせ論じられてきた二葉亭四迷と山田美妙による「言文一致」の創始についても、神話化された部分の解体を試みる。書き言葉口語体は明治初年には「談話体」という形である程度流布しており、明治20年代の「言文一致」運動によって創始されたわけではないことを明らかにする。

「第I部 日本語スタンダードの形成」は、「第一章 室町期の言語中央語の誕生」, 「第二章 ニュータウン江戸と近世スタンダード」, 「第三章 日本橋商人」, 「第四章 幕末・明治初期の共通語」, 「第五章 明治初年の東京山の手」, 「第六章 スタンダードの確立」, 「第七章 公共圏言語への可能性」, 「第II部 スタンダードから言文一致体へ」は、「第一章 明治初年の口語体」, 「第二章 山田美妙の言文一致体」, 「第三章 二葉亭四迷の言文一致体」, 「第四章 口語体の制覇」, 「第五章 回想と忘却」。

(2013年5月30日発行 岩波書店刊 A5判縦組み 368頁 3,100円+税 ISBN 978-4-00-024294-3)

木村一・鈴木進編

『J. C. ヘボン 和英語林集成 手稿——翻字・索引・解題——』

日本初の本格的和英辞書『和英語林集成』編纂に向けてJ. C. ヘボンが準備した手稿の翻字・索引・解題。明治学院大学図書館所蔵の実物を写した16ページにわたるカラーページを収める。幕末から明治初期の日本語を知るための基本文献『和英語林集成』の成立を解明する資料である。主に右ページを使用し、左ページは補足や追補に使われている見開きページを忠実に再現した精密な翻字と、現代仮名遣いによる索引、および詳細な解題を備える。手稿は250葉499ページ分に、アルファベット順でAの部のAaから、Kの部のKane, ru, ta までの見出し語6,736語を収録し、それに対する語義などが記

されている。

(2013年5月30日発行 三省堂刊 B5判横組み 784頁 23,000円+税 ISBN 978-4-385-36514-5)

佐藤栄著作

『見えない文字と見える文字——文字のかたちを考える——』

早稲田大学での『早稲田日本語研究』創刊20周年シンポジウムの内容のうち、「見えない文字」に関わることをまとめなおした書。

文字は、実際に用いられる字形と、文字のかたちのよりどころである字体に拠っている。概念の上にある字体を「見えない文字」として、日本語の文字のかたちを観察する。

「はじめに」として、「実現したことばだけがことばではない」、「現代の仮名のかたち」には、「ツ」のような「シ」の正体」「引き締まったカタカナ」「いけのくんの手紙」の「く」,「仮名のかたちの変化」には、「ぜい肉落として丸くなる」,「ギャル文字が教えてくれること」,「見えない字体変化をあぶり出す」,「漢字のかたち」には、「人と人ペン」「急」は足を伸ばし,汗を飛ばす」「漱石は誤字ばかり書いたのか」「くずし字にも字体はあるのか」,「まとめにかえて」には、「子ブタの貯金箱」の説明書を書いたのは誰だ」,「打ち言葉」時代の「字体」の各章をおさめる。

(2013年5月30日発行 三省堂刊 四六判横組み 160頁 1,600円+税 ISBN 978-4-385-36605-0)

吉田金彦著

『古辞書と国語』

本書は、『類聚名義抄』,『韻字集』ほか訓点語・辞書研究の基礎を築いた著者の研究論文を精選した書である。後人の「類聚名義抄」研究の基礎となり、古辞書分析の手本ともなった「図書寮本類聚名義抄出典攷」など、現在では参照困難となっている論考を改訂のうえ収録している。

「第I部 類聚名義抄の研究」には、「1 類聚名義抄の濫觴」,「2 図書寮本類聚名義抄出典攷」,「3 類聚名義抄の展開について」,「4 類聚名義抄の和訓の研究法」,「5 類聚名義抄にみえる和音注」,「6 観智院本類聚名義抄の参照文献」,「第II部 仏典音義と反切」には、「1 妙法蓮華経釈文の概要」,「2 法華経音義二点」,「3 成唯識論音義について」,「4 俱舍論音義について」,「5 新訳華嚴経音義私記の反切について」,「6 法華経単字の反切と字音」,「第III部 まほろしの韻字書『詩苑韻集』」には、「1 天理図書館に収蔵された「韻字集」」,「2 詩苑韻集とは何物か」,「3 韻字集所載の和訓の年代について」,「4 韻字集(詩苑韻集)の原型とその伝承」,「5 詩苑韻集と推定される韻字集の部立てと色葉字類抄との比較」,「第IV部 国語と古辞書」は、「1 古辞書への開眼」,「2 新撰字鏡とその和訓の特質」,「3 方言語彙と新撰字鏡の和訓」,「4 遊仙窟和訓の一特質」,「5 遊仙窟の諸本からみた和訓の特質」,「6 辞書と和訓に現れた

特殊訓点語], 「7 発音表記の複雑な訓点語の解釈」, 「8 詩経の和訓の盛衰」。
 (2013年5月30日発行 臨川書店刊 A5判縦組み 424頁 8,000円+税 ISBN 978-4-653-04059-0)

表現学会編

『言語表現学叢書 第一巻 言語表現学の基礎と応用』

『第二巻 言語表現学の諸相』

『第三巻 文学の言語表現学』

表現学という学問の全体像を明らかにするために、表現学会機関誌『表現研究』の創刊号以来の掲載論文を中心として編纂された選集である。第一巻には「言語表現学の基礎と応用」として「第一部 表現学の基礎理論」23編、「第二部 国語教育」8編、「第三部 外国語と言語研究への応用」16編の計49編を収める。第二巻には「言語表現学の諸相」として「文法論」12編、「文章論・文体論」15編、「修辞論・その他」13編の計40編を収める。第三巻には「文学の言語表現学」として「第一部 古典文学」27編、「第二部 近現代文学」20編の計47編を収める。表現学会50周年記念事業として計136編の論文を収録し、かつ巻ごとに解説を付す。

(第一巻：2013年6月1日発行 清文堂出版刊 A5判横組み 456頁 4,500円+税 ISBN 978-4-7924-1425-2)

第二巻：2013年6月1日発行 清文堂出版刊 A5判横組み 380頁 3,300円+税 ISBN 978-4-7924-1426-9

第三巻：2013年6月1日発行 清文堂出版刊 A5判横組み 420頁 4,600円+税 ISBN 978-4-7924-1427-6)

古田東朔著、鈴木泰・清水康行・山東功・古田啓編

『古田東朔近現代日本語生成史コレクション 第5巻

国語科教育 誕生と発展』

日本語史・日本語学史・国語教育に大きな影響を与え続けてきた、古田東朔の著作集全6巻の第5回配本。本巻では、幕末から明治・大正期の国語教育史を中心に収録している。

「1 江戸期の学習方式」, 「2 明治初期の国語教育」, 「3 教科書から見た明治初期の言語・文字の教育」, 「4 続・教科書から見た明治初期の言語・文字の教育」, 「5 国語教育——明治期における方言・標準語の教育——」, 「6 明治から大正へ（作文教育の歴史2）」, 「7 国語科教科書の推移と機能」, 「8 明治初期小学読本編集史稿」, 「9 学制当初における文法科」, 「10 日本の三代教科書にあらわれた対アジア認識」, 「11 小・中学校教科書における文学教材の変遷」, 「12 「コロンブスの卵」の話は、どう受け入れてきたか」, 「13 読解における文法学習」。

(2013年6月15日発行 くろしお出版刊 A5判縦組み 470頁 8,800円+税 ISBN 978-4-87424-594-1)

三牧陽子著

『ポライトネスの談話分析——初対面コミュニケーションの姿としくみ——』

本書は、ポライトネス理論を用いて多様な観点で初対面会話を実証的に分析した書である。コミュニケーション上のさまざまな配慮が特に意識される初対面状態での会話を対象として、談話レベルでのポライトネスの諸相を観察し考察する。ポライトネス理論を出発点としながらも、範囲を文から談話全体に拡大することの重要性を主張し、談話レベルで初めて明らかになる日本語のポライトネスを論じる。

「第1章 初対面会話研究と本研究」,「第2章 ポライトネス研究の展開と課題」,「第3章 本研究の初対面会話データ」,「第4章 スピーチレベル管理論」,「第5章 基本的スピーチレベル設定にみるポライトネスの表示」,「第6章 相手に対するスピーチレベル表示回避形式を利用した接近ポライトネス・ストラテジー」,「第7章 話題の選択と転換にみるポライトネス」,「第8章 自己開示をめぐるポライトネス」,「第9章 仲間意識の構築過程にみるポジティブポライトネスの諸相」,「第10章 FTA バランス探求行動」,「第11章 総合的考察」。

(2013年6月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 328頁 3,800円+税 ISBN 978-4-87424-592-7)

今野真二著

『日本語学講座 第7巻 ボール表紙本』

単独著者による全10巻予定の講座の第7巻「ボール表紙本」。明治初年頃から明治二十年頃にかけて、ボール紙を表紙にした簡易洋装本「ボール表紙本」が陸続と出版された。大岡政談をはじめとする「実録体小説」や、『浮世床』などの江戸期の文学作品、ジュールベルヌなどの海外の文学作品の翻訳、幕末明治期に出版されたさまざまな草双紙など、さまざまな内容をもったボール表紙本から明治期の日本語の多様性を読み解く。

「序章 ボール表紙本の概観」,「第一章 幕末から明治へ」,「第二章 テキストの対照」,「第三章 ボール表紙本から窺われる明治期の日本語」,「おわりに」。

(2013年6月20日発行 清文堂出版刊 A5判縦組み 253頁 3,500円+税 ISBN 978-4-7924-0991-3)

松井智子著

『そうだったんだ！日本語 子どものうそ、大人の皮肉
——ことばのおモテとウラがわかるには——』

「そうだったんだ！日本語」シリーズの第4巻。会話を含めたすべての言語コミュニケーションの基盤になっている「ことばと心を理解する能力」について、実際の会話例

や心理実験の結果を例にあげながら平易に解説した書。「第一章 3歳児は大人の鏡」,「第二章 うそや皮肉は難しい」,「第三章 語用障害が教えてくれること」,「第四章 ことばのオモテとウラがわかるということ」,「第五章 意図が伝わるしくみ」,「第六章 過大評価しがちな話し手」の6章からなる。著者は、関連性理論 (Relevance Theory) に基づく語用論研究からスタートし、近年は発達心理学の手法を用いながら、コミュニケーション能力の発達とその支援について研究を行っている。本書の前半 (第一章~第三章) では、「ことばと心を理解する能力」が幼少期から発達するプロセスと発達障害が生じた場合の困難について紹介しながら、会話力とは何か? という問題について考察している。後半の第四章~第六章では、関連性理論の視点からコミュニケーションが成立するしくみについて解説している。

(2013年6月25日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 246頁 1,600円+税 ISBN 978-4-00-028624-4)

前川喜久雄編

『講座日本語コーパス 1 コーパス入門』

国立国語研究所で行われている日本語コーパスのプロジェクトに基づき、日本語コーパスとは何か、その構築から研究での利用・活用までを概観し、日本語学、言語学での統計学的アプローチを解説する。シリーズ全体を俯瞰する1冊。

広い意味での言語研究においてなぜコーパスが必要とされ、実際にどのように利用されているかについて読者の理解を深めること、日本語のコーパス整備の現状について、整理された知識を読者に提供することの二つを目的とする。

「第1章 コーパスの存在意義」(前川喜久雄),「第2章 コーパスと計算言語学」(辻井潤一),「第3章 言語教育とコーパス」(投野由紀夫),「第4章 言語処理とコーパス」(徳永健伸),「第5章 日本語コーパスの発展」(丸山岳彦),「第6章 言語調査の系譜とコーパス」(山崎誠),「付録A コーパス検索ツール(1)『中納言』の使い方」(小木曾智信・中村壮範),「付録B コーパス検索ツール(2)全文検索システム『ひまわり』」(山口昌也)。

(2013年7月10日発行 朝倉書店刊 A5判横組み 196頁 3,400円+税 ISBN 978-4-254-51601-2)

井上優著

『そうだったんだ! 日本語 相席で黙っていられるか ——日中言語行動比較論——』

「そうだったんだ! 日本語」シリーズの第5巻。「言語の対照研究とは、二つの言語を比べながら、それぞれの言語の現象がともに自然なものとして見えてくる見方—二つの言語を公平に見ることができる見方—を見出す研究である」という考え方に立って、日本語と中国語の文法やコミュニケーション様式について考察した書。著者の実生活での

経験と文法研究者として日本語と中国語の対照研究を行ってきた経験が合わさって生まれた書である。「第一章 何のためにしゃべる?」,「第二章 比べて考える」,「第三章 視野を広げて考える」,「第四章 自立型の文法と協力型の文法」,「第五章 天秤型コミュニケーションとシーソー型コミュニケーション」,「第六章 日本語をふりかえる」の6章からなる。

(2013年7月24日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 204頁 1,600円+税 ISBN 978-4-00-028625-1)

佐藤亨著

『現代に生きる日本語漢語の成立と展開——共有と創生——』

本書は、語彙史研究の観点から現代日本語における漢語の位置、実態およびその性格を明らかにするとともに、日本語漢語の成立とその経緯について、歴史的に辿りながら考察した書である。

中国古典籍に用いられ、日本に伝来使用されてきた漢語と、明代以降中国で使用され日本の近世から明治にかけて伝えられた漢語を「伝来漢語」とし、漢籍等の典拠が確かめられないものの、古代から近世末ころまでの国語に使用が認められる漢語と、近世末以降、独自に造られた新造の漢語あるいは翻訳によって生じた翻訳語などで、国語での用例が指摘できる漢語を「日本製漢語」とする。

伝来漢語について、その出自、源流と使用の実態、日本語の中での位置や定着過程中に生じる日本語化の問題などを考察し、日本製漢語については、訳語を含めた新造漢語の範囲や語成立の背景と使用の実態および社会構造の変化との関連などを考察する。

なお本書は、幕末・明治初期に焦点をあてて現代語との関連をまとめた『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』(明治書院)を包括しており、その続編とも言える。

「序章 序論」,「Ⅰ 伝来漢語の受容と共有」は、「第一章 漢語・仏典に典拠があり、わが国近世中期ころまでに用例のある漢語」,「第二章 漢語・仏典に典拠があり、わが国近世後期以降に用例のある漢語」,「第三章 中国近世以降の文献に典拠をもつ語彙の受容とその影響」,「Ⅱ 漢語の創生——日本製漢語——」は、「第四章 上代以降近世末までに用例があり現代に続く漢語」,「第五章 幕末・明治初期に用例のある漢語」,「第六章 明治中期以降大正中期に用例のある語」,「第七章 大正末ころから昭和二十年ころまでの漢語」,「第八章 昭和二十年以降昭和六十年前後までの漢語」,「第九章 昭和六十年前後からの漢語」,「第十章 結語」,「あとがき」,「索引(事項索引・語彙索引)」。

(2013年7月25日発行 明治書院刊 A5判縦組み 472頁 15,000円+税 ISBN 978-4-625-43337-5)

野村雅昭編

『現代日本漢語の探究』

現代日本における漢語の輪郭と諸相を明らかにするための研究書。現代日本漢語にお

ける造語法・機能・形成・使用の実態・東アジア諸語との語彙交流など多方面にわたって、14論文を収める。漢字・漢語研究会ゆかりの研究者による、編者の退職記念としての論文集の性格も持つ。

「序章 現代日本漢語研究の展望」(野村雅昭)、「I 造語の単位と機能」は、「日中文字音語基の造語機能の対照」(荒川清秀)、「接辞性字音形態素の造語機能」(山下喜代)、「字音語基の造語力」(中川秀太)、「品詞性による字音複合語基の分類」(野村雅昭)、「臨時的な四字漢語の形成——文章論的な視点から——」(石井正彦)、「基本漢語の多義性——「簡単」とその類義語の意味分析——」(宮田公治)、「II 近現代日本語と漢語」は、「近代英和辞書の訳語と漢語——『附音挿圖英和字彙』(1873)と『増補訂正英和字彙』(1882)を中心に——」(李 慈鎬)、「近現代の漢語副詞の成立」(趙 英姫)、「新語辞典と漢語」(木村義之)、「漢語表記のゆれ」(笹原宏之)、「III 東アジアにおける語彙交流」は、「近代日本漢語の形成と中国語——漢訳『万国公法』から和訳『国際法』へ——」(陳 力衛)、「中国語に借用された明治期の漢語——清末の4新聞を資料とした場合——」(朱 京偉)、「東アジアにおける専門用語と漢語——韓国語の場合を中心に——」(宋 永彬)。

(2013年7月30日発行 東京堂出版刊 A5判横組み 392頁 13,000円+税 ISBN 978-4-490-20836-8)

中村桃子著

『翻訳がつくる日本語——ヒロインは「女ことば」を話し続ける——』

書き言葉では、文学作品やテレビのテロップから取扱説明書まで、話し言葉では、映画やドラマの吹き替えからインタビューまで、日常触れる日本語の大きな部分を占める、翻訳という側面から見た日本語の姿を考える書。

翻訳は日本語らしい日本語を保存したり、新しい表現を作り出したり、大胆に変化させていることを示す。外国人女性の日本語が日本女性よりも女らしいこと、翻訳でしか使われない「男ことば」があること、日本語のさまざまな言葉づかいは〈白人性〉や〈黒人性〉、〈奴隷性〉など日本とは一見関わりの薄い人種や階級の区別とも関連して形成されていることを明らかにし、日本語の変化が翻訳によって促される側面があることを主張する。

「第I部 翻訳の不思議」は、「1 西洋ヒロインは「女ことば」を話し続ける」、「2 西洋の若者は「気さくな男ことば」で語る」、「3 黒人が話す「方言」」、「第II部 翻訳を考える」は、「4 言葉づかいとアイデンティティ」、「5 翻訳が支える日本語らしさ——「女ことば」——」、「6 翻訳がつくりだす他者のことば——「男ことば」——」、「7 翻訳が再生産する差別——「方言」の場合——」、「第III部 翻訳から変わる日本語」、「8 親疎で使い分ける「女ことば」と「標準語」」、「9 女性らしさだけじゃない「女ことば」」、「10 一九七〇年代洋画字幕に見る強い女の「女ことば」」、「11 翻訳を楽しむ」。

(2013年8月5日発行 白澤社刊 四六判縦組み 280頁 2,000円+税 ISBN 978-4-7684-7951-3)